

ヘルムート・ケーニヒとフリードリヒ・フレーベル

— あるマルクス主義者によるフレーベル理解 —

人文学部 教育・臨床心理学科 教授 勝 山 吉 章

1. ヘルムート・ケーニヒと唯物史観

フレーベルに関する研究は、ボルノーなどに代表されるドイツ・ロマン主義からフレーベル思想を考察する機会が多い。日本のフレーベル研究の第一人者荘司雅子もその研究方法を取り入れている。だがフレーベルが生きた時代は、ロマン主義の他に社会主義思想が勃興した時期でもある。そして彼は好むと好まざるにかかわらず、社会主義や労働運動の波にのみ込まれていった。そういう側面からのフレーベル研究はまだまだ少ないと言える。

本稿は、旧東ドイツを代表したマルクス主義教育史研究者ヘルムート・ケーニヒ（1920-2005）が残した、ドイツ1848・49年革命（三月革命）とフレーベルの関係に関する論考⁽¹⁾を解題することを通して、フリードリヒ・フレーベルの再評価を試みるものである。

ヘルムート・ケーニヒとはいかなる人物であるか。DIPF（Deutsches Institut für International Pädagogische Forschung「ドイツ国際教育研究所」）は、2013年1月から12月にかけてケーニヒの遺稿集展を開催している。その際、彼について次のように紹介している（DIPF：Erschliessung des wissenschaftlichen Nachlasses von Helmut König）。

Prof. Dr. Helmut Königは、ドイツ民主共和国（東ドイツ）の国際的に著名な教育学者で教育史研究者である。1950年から1969年、ベルリン・フンボルト大学教育学部で研究と教育に従事し、1965年から68年は学部長だった。東ドイツの教育科学アカデミー設立によって、当研究所の教育史部の部長となる。1981年病気を理由に早めに定年退職となる。

今日まで、ドイツにおける国民教育史やフレーベルに関する史料に基づいた多数の研究を残した。フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を1984年に編集し、ベルリンで発見されたフレーベルのたくさんの遺稿に刺激された。彼の最後の刊行物は、書簡集『フレーベル賛歌—子どもと人間の友あての女性たちの書簡—』（1990年）だった（同書は、1991年に岩崎次男他によ

て邦訳されフレーベル館から出版された）。

筆者は1988年4月にベルリン郊外のケーニヒ教授の自宅で本人と会った。気さくな人柄で、はるかな東洋の国から会いに来てくれたことを大変喜んでくれた。第2次大戦に従軍して、ナチズムに加担した反省から、二度と銃をもたないと誓ったこと、真の民主主義と社会主義の理想を求めて東ドイツ在住を選んだことなどを語ってくれた。彼の当時の研究は、妻であるパートナーとの共同研究で、フレーベルの直筆の書簡をまとめて、それを近日中に刊行する予定であることを話してくれた。これが上述書（1990）である。

本稿で解題する論考は、訪問した日に彼から直接手渡され邦訳を快諾してもらった。それから長い年月が過ぎた。それは冷戦の終了と、東西ドイツの統一によって、ケーニヒのような教条主義的ともみえるマルクス主義的な唯物史観によってフレーベルを解釈することに疑義を感じたからであった。

唯物史観や社会発展の五段階論は、戦後東西冷戦が進むなか、戦後の反ファシズム研究や少なくとも50年代までの社会主義優位論とあいまって流行した感がある。日本も、「55年体制下」で革新を自称する勢力によって進められてきたが、社会主義社会の矛盾の露呈、学術研究における社会史研究の流行、高度経済成長の行き詰まりに伴うポストモダン論議などによって、教条主義的なマルクス主義や唯物史観は否定されていったと言える（良知1971／1978、森田2003）。また東西冷戦の終了やドイツ統一はマルクス主義の終焉をもたらしたかに見えた。

だが冷戦終了後、グローバル化のなかで新自由主義という剥き出しの強欲資本主義が跳梁跋扈する今日、あらためて、下層階級の立場にのみ立脚した階級闘争を問うマルクス主義や唯物史観からフレーベルを再評価することは、このような時代状況において意義のあることではないか。

唯物史観とは、ヘーゲル哲学の弁証法をヒントに、マルクスやエンゲルスによって唱えられた歴史観である。人間の歴史は、自然界と同様に客観的な法則が支配しており、それは生産力と生産関係の矛盾によって進歩する。

人間の歴史は、原始共産制社会、封建制社会、資本主義社会、社会主義社会そして共産主義社会へと発展するが、そこには生産力の向上に伴う生産関係の矛盾があり、この矛盾を解決するために階級闘争が生じる。

極めてざっくり言えば、人間の歴史は、支配（搾取）する支配層（悪玉）と支配される被支配層（善玉）の闘いの歴史であり、生産性が向上すれば両者には必ず矛盾が生じ、善玉（革新）が悪玉（反動）を打倒することで歴史は進歩するというもの（マルクス『経済学批判』『ドイツ・イデオロギー』参照）。

したがって、政治や法律、教育などといった上部構造は、生産関係を中心とする経済の形式（土台あるいは下部構造）によって規定される。社会的意識もこの土台によって規定されるから（「存在が意識を規定する」）、教育観や教育論もこの土台によって形作られる。旧東ドイツの教育史研究では、資本主義社会にあつては、労働者階級や貧農は被支配層（善玉）であるから、彼らの教育観や彼らの立場に立つ教育思想は「進歩」であるが、資本家などの支配層（悪玉）の教育観や彼らの立場に立つ教育思想は保守・反動であるというステレオタイプが目立った⁽²⁾。ケーニヒも例外ではない。

フレーベルは、半封建制社会からナポレオン支配とその解放戦争（1813）による東の間の自由主義の時代、ウィーン会議（1815）後の反動の時代、1830年代にはじまるドイツ資本主義の成長とその成長がもたらす矛盾から来るドイツ革命とその反動の時代に生きた。つまりフレーベルは、ドイツ史における「進歩」と「反動」が交互に繰り返される時代（この歴史観には当然、批判もある）を生きたのである。ケーニヒは、この時代状況（土台）からフレーベルの教育思想と教育活動を「進歩」の側からのみ解き明かそうとする。

確かにフレーベルは、ペスタロッチの下で学んだ青年期から、貧民教育の重要性を見ていた。またブルシェンシャフト運動や自由信仰教団といった反権力派、そしてドイツ革命派からの信頼を得ていた。だが、フレーベルの生の合一の思想は、貧者も富者も、王侯・貴族も労働者階層も全てを合一していくものであり、両者を等しく受け入れていた。幼稚園運動の草創期、広く幼稚園を普及させるためには、保守も革新も彼には無関係で、労働者階層の前で行った幼稚園紹介をそのまま貴族階級の前でも行っている（プリューファー：156）。幼稚園禁止令のときは、彼自身もそのことで悩み、「私の党派的な生活の内部も同様に無防備なのです。私は、私に関することを受け入れようとする人々を誰も締め出すことはできないのです。なぜなら、どの政党のなかの子どもたちも正しい教育を必要とするからです」と述べている（プリューファー：168）。

したがってケーニヒのフレーベル解釈は極めて一面的で偏ったものであることは間違いない。だが、この一面

的で偏った解釈のなかに、現代教育が引き継ぐ遺産があるのではないか。

旧東ドイツの教育史研究者がフレーベルを研究する意義は、古典的ブルジョア教育学のなかに「進歩」の側に立つ優れた教育遺産が伝統としてあり、その伝統を継承・発展させることが民主主義社会、社会主義社会の建設に大いに役立つというものであった（ゲルト・ガイスラー 1986）。古典的ブルジョア教育学者であるフレーベルのどこに優れた教育遺産があるのだろうか。否、教条主義的なマルクス主義者が、本来否定して当然のブルジョア教育学者フレーベルのどこに惹かれたのであろうか。

ケーニヒは、ドイツ1848/49年革命（三月革命）期における教員運動とフレーベルとの関係に注目する⁽³⁾。

2. ドイツ三月革命と教員運動

工業化を中心とするドイツの近代化は、1830年代にはじまる。1834年にドイツ関税同盟が成立し、翌年にはドイツではじめて鉄道が開通し、プロイセンを中心にドイツの工業化は飛躍的に発展した。工業化の進行は、大都市ベルリンにみられるような大衆貧困状況（パウペリスムス）を進行させ、三月革命を準備した（川越 1998）。その一方で領邦制下での封建的支配体制によって逼塞していた市民階層が、自らの政治的、経済的自由を求めてリベラルなイデオロギーを形成していった。彼らは、手工業者、職人、農民たちとフランス7月革命の影響下、封建制の打破と立憲主義、国民主義、ドイツ統一を求め運動を展開した。1832年5月にバイエルンで行われたハンバッハ祭は、カールスバード決議（1819）以降、停滞していたこのような運動の最盛を示す象徴的事件であった。同集会では統一されたドイツ共和国が高らかに宣言された。

1840年に即位したフリードリヒ・ヴィルヘルムIV世は、自らの自由主義への若干の傾倒もあって、1841年に検閲令をしばらくの間廃止した。これ以降、立憲主義、国民主義を掲げる自由主義運動が高揚し、様々な市民集会や国民集会が開催された。例えば、1847年9月のオッフエンブルク集会（バーデン）では、出版の自由や学問の自由、個人の自由や団結の自由などが要求された。

この「三月前（Vormärz）」には、教員たちも様々な教員集会の開催や教員組合（Verein）の結成を通じて、教員の待遇改善や社会的地位の向上および聖職者支配からの学校の解放を求めて運動した（井上 1975）。当時の国民学校教師の俸給は、非熟練の日雇い労働者と同等かそれ以下であり、40～50年働いても年金生活などは望むべくもなかった（勝山 1997：8-9）。また、学校に関して何も知らない聖職者がいきなり校長となったりした。

フレーベルは、1845年に教員組合の結成を呼びかけ、

ディースターベークは1842年にブランデンブルク州教員組合の設立を企図した。ヴァンダーは、1840年から42年にかけて、三度のシュレージエン教員祭を成功させた。だが、時の宗務大臣アイヒホルンは、このような教員運動の広がりを危険視し、組合の結成を禁止した。

リベラルな市民層や知識人層に主導された自由主義的運動を、領邦権力は威嚇や制裁によって弾圧していたが、社会情勢は次第に緊迫していった。1844年にはリンネル工業の斜陽化に起因するシュレージエン織工一揆が起こり、ベルリンでも木綿労働者によるストライキが行われた。1847・48年は、一般的に不作であったことからジャガイモやパンの値段が高騰し、大都市を中心にシャリバリや飢餓暴動がおこった。

社会不安と民衆の不満が高まり、市民層や知識人層および労働者層によって議会の召集や出版の自由等を求める集会が、48年パリの2月革命成功に後押しされて開催されていった。そして3月18日、王宮の前に集まった群衆に対して軍隊が発砲したことからドイツ三月革命が勃発した。市街戦の様子をみたフリードリヒ・ヴィルヘルムIV世は、民衆に譲歩する必要を感じ、22日に憲法の制定と、個人の自由や集会・結社の自由、責任内閣制などを約束した。

市民層、知識人層、労働者層、職人層などによって様々な集会がもたれた。例えば共産主義者同盟の一員だったシュテファン・ボルンによって主導されたベルリン労働者会議（1848年8月23日～9月3日）には、国民学校教師も参加し、労働者友愛会が組織化された。同会は、その決議において、労働者の待遇改善や労働条件の改善とともに14歳未満の無償教育、民衆図書館の設置、学校の国家管理、教員の地位の向上と待遇改善などを訴えた（川越1998:219／太田2004:196）。マルクスやエンゲルスは、1847年の『共産党宣言』や48年の『ドイツにおける共産党の要求』において、無償の普通教育を綱領に掲げた。

5月18日にはフランクフルト国民議会（ドイツ国民議会）が、同月22日にはプロイセン国民議会がそれぞれ開設された。アイヒホルンの訓令以降、下火になっていた教員運動も再び活発化し、ドイツ各地で教員集会がもたれ、呼びかけ書や国民議会への陳情書が採択された。教員たちは革命運動の遂行によってのみ、学校制度の改革や教員の待遇改善と社会的地位の向上が達成されると実感した。

出版の自由に伴い、教育面における三月革命の精神を最も明瞭にしたのがフリードリヒ・カッパ博士（ハレのギムナジウム校長）による『ドイツ国民教育改革への呼びかけ』（1848年3月31日付）だった。同書で彼は、反動的な教育制度を批判し、乳児学校から大学までの統一学校制度、大学卒資格の国民学校教師、教会からの学校の解放と国家による学校管理などを求めた（König1980, 邦訳131）。この『呼びかけ』は、その後の様々な教員集

会や教員組合およびドイツ国民議会やプロイセン国民議会などに影響を及ぼした。

1848年3月26日には、共和主義者ヴィルヘルム・コッホを座長とする教員集会が開催され、「プロイセン教師への呼びかけ（Aufruf）」が採択された。同「呼びかけ」では、国民学校から大学までの統一学校制度および教員の経済的社会的地位の向上が唱えられた。このコッホが次に主催したベルリン・チボリ集会（1848.4.26.）には、2～3百人のベルリン教師と3～4百人のベルリン外の教師が集まった。同集会では、エドゥアルド・ヒンツェが起草したプロイセン国民議会への陳情書が採択された。要点は以下の通り（Pretzel 1921, 邦訳100）。

1. 特別な教育相の任命。
2. あらゆる種類の現場教師から選ばれた委員会の設置。
3. 教職員による学校の視察。
4. 秘密の素行調査票の廃止。
5. 教師と他の市民によって構成された郡、県、帝国（Reich）の学校会議の設置。
6. 学校は国立の学校であること（だから、あらゆる宗教、宗派、パトロン、自治体の優先権は廃止！だから万人に無料の教育をも！なぜなら、たまたまの財産が、未来の生活設計を規定するのではなく、能力のみであるはずだから）。
7. 前項目から生じるのが国民学校、高等市民学校、ギムナジウムそして大学となる系統的な教育施設の組織化（個々の教育施設は系統的な全体を形成せねばならず、相互の関係性無しに並存できない。全ての教育の基礎は、万人にとって例外なしに国民学校である。国民学校は、標準的に理解すると、だいたい14歳までの生徒を有する。そこから生徒は直接に職業生活に入るか、上の学校に進む）。
8. 女学校の校長は教師からだけ（女性ではない）。
9. 国民学校から職業生活に進んだ人たちのために、学校から継続教育への組織化。
10. 国民学校とリンクした児童養護施設（Kleinkinderbewahlanstalt）の組織化（産業の発達によって、父母がますます家族関係から奪い取られているから）。
11. 私立学校は、理事長や校長の権利を考慮しながら、国家的施設となる。
12. 私立学校が将来なお必用というのなら、私立学校の設立は認可制となる。
13. 教師を養成する施設は、大学の一部門であり、理論的・実践的教育がなされる（大学を出た者と初等教員のこれまでの差別はなくなり、教師は均等に養成される）！
14. 専門の授業科目をもつ者は、高等市民学校もしくはギムナジウムの修了証書を得ていなくてはならな

- い。
15. 女教師の養成施設の設立は、高等女学校に依拠する。
 16. あらゆる教職員 (Schulamt) 候補者は、自らの人生を国民学校の第一学年から始める (なお、かつてのお決まりだった、初等教員とアカデミックに養成された教員との差別は無くされねばならないだろう)。
 17. 田舎であろうと都市であろうと、給料の最低値は250から400ターラーである (お金は常に、現金である必用はない)。
 18. 高い地位への昇進は能力による。
 19. 給料のアップは、職務への忠誠と職務期間による。
 20. 寡婦や孤児の年金や扶養に関しては、教師は他の国家官吏と同等である。
 21. 私立学校の校長や教師はあらゆる点で、他の国家施設の教師と同等である。

基本は、教師 (とくに国民学校教師) の社会的経済的地位の向上、教会からの学校の解放と統一学校制度および無償の国民教育である。ここで国民学校と就学前教育との接続が提唱され、女教師と女教師養成に対する配慮が見られる。このことはやがて教員運動におけるフレーベル幼稚園と幼稚園女教師育成への要求として発展していく。なおコッホやヒンツェは、ベルリン警察署長ヒンケルディーによって危険人物としてブラックリストに掲載され、後の反革命において迫害された。

シュレージエンのヴァンダーは、1843年にはドイツ全土にわたる教員集会を提案していたが、革命期にそれが実現されていく。まず第1回ザクセン教員集会が4月25日にライプツヒで開催され、8月8日には第2回ザクセン教員集会がドレスデンで開催された。同集会の主権者には、ケル⁽⁴⁾やチェチェ⁽⁵⁾など、後にフレーベル幼稚園の普及を目指すルードルシュタット教員集会(1848.8.17-19)を主催した者がいた。第2回ザクセン教員集会では、全ドイツ教員集会開催と全ドイツ教員組合結成の呼びかけがヴァンダーによって行われた。ヴァンダーは、ドイツ統一と、幼児教育から大学教育までの教員団の団結と全国組織の教員組合の結成を呼びかけた。

48年9月28日から30日にかけてアイゼナハで、全ドイツ教員集会が行われ、全ドイツ教員組合の結成が決定した。同集会ではギムナジウム教師で後にドレスデン5月蜂起のリーダーとなるDr.ケーヒリーによって講演がもたれた。その講演をもとに、以下の事項が決議された(Pretzel 1921、邦訳101)。

1. 幼稚園から高等教育機関まで統一的に繋がって組織され、全ての人間的・民族的基盤に基づくドイツ

- 国民学校は、他の国家の学校と同一の権利と責任をもつものとして国家の全機関に属す。
2. 統一された国民学校の独立した指導は、それゆえ一教員組合や学校宗教会議の法的に確認された考慮下で—とくに公的国民教育の省庁によって生じる。同省のメンバー (教育評議員) ならびに郡や地区の学校評議員は、学校の実践家からのみ成り立ち、様々な種類の国民学校を代弁する。
 3. 直接的にもっぱら省庁の下で、国庫からのみ保持される特別な国民教育施設が存在する。実科学校、ギムナジウム、専門学校、大学、師範学校である。一部、自治体の資金で維持されている一般的な国民学校 (幼稚園、初等学校、市民学校、補習学校) に、これらを省庁は郡や地区の学校評議員 (Schulrat) を通して指導するのだが、自治体は学校、家庭、教会の代表者からなる学校理事会 (Schulvorstand) を通して、法的に規定された影響を行使する。すなわち、教師の選考、学校の外的管理に関わることである。(採決後、非常に強固な少数派から議事録に対する度重なる抗議がなされた。一つは、文章全文に対して、一つは、その中で確認された国家や教会や自治体に対する学校の関係に対して)。
 4. 一般的な学校の全ての授業に対して授業料は徴収されない。また、特別な教育施設の無料登校は、規則に従って、そのための能力と素質のある貧民に継続される。
 5. 教師の適切な準備教育と試験、きちんとした雇用と昇進、平等な市民的地位と資格、充分な俸給と年金、ならびに教師の寡婦と孤児の扶養は、現在の諸要求に相応した教師の職務に必要な不可欠な条件であり、また、新たな国民学校の必用不可欠な条件である。

アイゼナハ集会の盛り上がりをも、市立学校長カール・マーゲルは次のように感激したとケーニヒは述べる。

さらに、若干の国民学校教師、すなわちシュレージエンとザクセンの連中が革命に酔った演説を行った…ドイツ教員組合が設立された後、集会の大部分の連中が、ちょうどアイゼナハに居合わせた学生たちや、アイゼナハの住民の一部と一緒に、ワルトブルクへの隊列で団結した。当地で、また、夕方遅くまで町で、多くの演説がなされた…それを聞いた人々は、他日の朝に起こった当地の一部兵士の反乱を、その演説のせいにした。(König 1980、邦訳133頁)

ここで決議された幼稚園から大学までの統一学校、公費による学校運営、住民代表の学校理事会による教員選考、無償の国民教育、教師の待遇改善などは、革命期の

教員運動の共通要求となる。また本稿との関係で言えば、幼稚園が統一的国民学校制度の第一階梯とみなされ、革命派の教員たちに受け入れられことである。このことはケーニヒが鋭く指摘するように、後の反革命によるフレーベル弾圧の理由となっていく。

各地でこのような集会が開催され、そこでの論議がドイツ国民議会やプロイセン国民議会に陳情書等のかたちで提出された。例えばベルリンでは6月21日に、フレーベルの良き理解者であり、自ら幼稚園も設置したルードヴィヒ・ヒルデンハーゲンなどプロイセン国民議会左派に属す議員たちが、ディースターベークやカップと論議して、議会に民主的な教育条項案を提出した。その内容は教会からの学校の解放、無償の国民教育、宗派による教育の排除、公費による学校運営等である(勝山1993:1062)。

フランクフルトでは、ドイツ国民議会の教育条項に自分たちの意見を反映さすべく、ケルたちによって「ドイツ国民学校教員会議」(1848.10.16-21)が開かれた。このような教師たちによる運動によって出された要求は、ドイツ帝国憲法やプロイセン欽定憲法の教育条項に実現されていく。その内容は、学問とその教授は自由、無償の国民教育、学校設立の自由、公費による学校運営、住民の自治による教員の選考、教師の地位の向上などである。

これらの憲法条項は、後の反革命のなかにおいて復古にされ、1850年4月にはプロイセンによって教員組合参加禁止令が公布された。1854年には、キリスト教信仰と愛国心を土台とする反自由主義的・反国民主義的特徴をもつシュティールの「三規定」が公布された。フレーベルの幼稚園禁止令もこのような時代状況において出されたものと理解していかねばならない。

本稿の課題との関係から繰り返すと、自由主義的で共和主義的な教員運動家の多くが後述するようにフレーベルを支持し、幼稚園を積極的に設置していった。またフレーベルもこのような運動家と密接な交流をもった。このことが後の反革命において彼に災いをもたらす。ケーニヒは、このことで自らの唯物史観からフレーベルを「進歩」の立場に立つと規定している。次にこの「進歩」の詳細をみてみよう。

3.1. ブルシェンシャフトとの結びつき

ケーニヒは、若き日のフレーベルがペスタロッチの貧民教育から多大な影響を受けたこと、そして彼の幼稚園には、粗末な身なりをした子どもがいたことをもって、フレーベルがプロレタリアートの立場にたっていた証左と論じている(König 1984, 邦訳730頁)。

そして若きフレーベルとフリードリヒ・ルードヴィヒ・ヤーンやブルシェンシャフトとの結びつきをあげる。ブルシェンシャフトとは、ウィーン体制下で次第に保守

化・反動化していくドイツの政治を変えようと対ナポレオン戦争から帰還した学生たちによって、1815年にイェナ大学で発足した学生組合運動である。

ナポレオン占領下のベルリンでフレーベルは、アルントやフィヒテなどのドイツ国民主義、愛国主義の影響を受けながらペスタロッチ主義者ヨハン・エルンスト・ブラーマンの学校で教師となる。同校には体操を通じて対ナポレオン祖国解放戦争を準備し、ブルシェンシャフト運動の精神的支柱となるヤーン、そのブルシェンシャフト創設者の一人であるフリードリヒ・フリーセンなどがおり、彼らは反仏、ドイツ共和国を唱える秘密結社ドイツ同盟に属していた。また解放戦争ではリュッツォー義勇軍のリーダーとなった。このヤーンがフレーベルをランゲタールやミッデンドルフに紹介した。ランゲタールやミッデンドルフは後にブルシェンシャフト運動のリーダーとなる。

解放戦争後、フレーベルはカイルハウに学園を創設するが、その教師たちの多くがブルシェンシャフト運動家だった。ランゲタールやミッデンドルフ、そしてバーロップ。ヤーンの体操は信奉されており、彼らは自らをブルシェン体操家(Burschenturner)と呼んだ。イェナ・ブルシェンシャフトの創設者でワルトブルク祭の指導者ヴェッセフェルト兄弟もカイルハウ教師となった。カイルハウでは解放戦争の歌や王侯を嘲笑する歌が歌われ、ユリウス・フレーベルによればカイルハウは「当時の革命的精神の温床」だったという(König 1984, 邦訳735/勝山吉章1990, 1998)。

ブルシェンシャフト運動家カール・ザントが保守的な作家コツェブエを殺害したザント事件(1819)を契機にブルシェンシャフトへの迫害が始まる。カイルハウ学園は当局によって「扇動家の巣」として迫害の対象となり、それはツェーの視察に繋がった。カイルハウ学園衰退の原因となるツェーの視察は、多くの先行研究(例、莊司)が述べるようなバーロップが当局から嫌疑をかけられたのではなく、ケーニヒによる分析通り、カイルハウそのものの性格にあったというのが正解であろう。

3.2. 自由信仰教団との結びつき

フレーベルが自由信仰教団(Freie Gemeinde)と結びついていたことが、無神論を理由に幼稚園禁止令の主要な要因となったとケーニヒは主張している(König Teil4, S.169)。1840年代以降、自由主義の波は宗教界にも押し寄せ、プロテスタントやカトリックのドグマとの関係を絶ち、世俗権力と野合する教会権力に対する批判が聖職者たちに生じた。その端緒は1840年2月にマゲデブルクでW・F・ジテンニス牧師が十字架像礼拝を偶像崇拜として弾劾したことである(石塚1983:137)。プロテスタント内部に「光の友」(Lichtfreunde)、後の自由

信仰教団が、カトリック内部にはドイツ・カトリックが生まれ、彼らは、信仰の自由、言論の自由、学問の自由などを求めた。両者はユダヤ教にも寛容であり、1850年以降は「自由信仰教団協会」(Religionsgesellschaft freier Gemeinde)として統合されていく。

自由信仰教団は、1844年のシュレーゲン織工一揆に際して救援活動を行ったことからプロイセン政府は集会禁止令を出していた。このように反体制派とみなされた同教団だが、そこには中間市民層に支持された穏健なウーリヒ派と、下層階層から支持された共和主義的急進派ヴィスリセヌス派がいた。このグスタブ・アドルフ・ヴィスリセヌスとカイルハウ学園は密接に繋がっていた。ヴィスリセヌスは、バーロップとともにハレ・ブルシェンシャフトのリーダーであり、両者は交流していた。また、フレーベルもヴィスリセヌスと交流していた。フレーベルの姪の娘で幼稚園教師だったヘンリエッテ・ブレイマンによると、三月革命最中の5月にカイルハウを訪れたとき、ヴィスリセヌスの肖像が「真実に反対することはできない」という本人の署名とともに掲げられていたという(König1985, 邦訳142頁)。

ヴィスリセヌスは、1824年に12年の禁固刑を言い渡され29年に恩赦されたが、その急進性は変わらず、フランクフルト国民議会が保守化していくのに対抗して組織された民主主義者協会とも関わりザクセンに同協会支部をつくる。なお、フレーベルの甥ユリウス・フレーベルは、1848年10月26～30日にベルリンで開催された民主主義者大会にマルクスとともに参加し、議長を務めた。ヴィスリセヌスは後の反革命でアメリカに亡命した。

ケーニヒは、フレーベルと結びついていた自由信仰教団員として多彩な人物をあげている。ルードルシュタット教員祭を成功させたケルもその一人。ここでヴィスリセヌス以外の代表的な人物をあげるなら、ルードヴィヒ・ヒルデンハーゲン、エドゥアルト・ヴィルヘルム・バルツァーであろう。

ヒルデンハーゲンは、プロイセン国民議会の議員となり、学務委員会の委員長を務める。フレーベルに陶醉し、自ら幼稚園を経営し、1847年にはフレーベル立ち会いの下で子ども祭を成功させている。アマリエ・クリューガーは彼のいところあたり子ども祭に参画。同幼稚園教師でもあった。ヒルデンハーゲンは、後の反革命で迫害され、幼稚園も閉鎖せざるをえなくなったが、それをフレーベルが皮肉ったことでヒルデンハーゲンが憤慨したことをケーニヒが紹介している(König 1987, S.95)。W・ランゲやJ・プリュウファータちは、しばしばフレーベルが唯我独尊で、自らを非難するものに対しては容赦ない攻撃を浴びせたことを指摘しているが(それでランゲターはフレーベルと距離を置いた)、ヒルデンハーゲンに対してもそうであったのだろう。

バルツァーは、ヴィスリセヌスの盟友であり自由信仰

教団創設者の一人である。ドイツ国民議会準備委員会委員でプロイセン国民議会議員。とくにノルトハウゼンでフレーベルの幼稚園運動を促進した。同幼稚園がプロイセン幼稚園禁止令の端緒となった。

自由信仰教団と統合していくドイツ・カトリックで、フレーベルと強く結びついていた者としてケーニヒはロンゲ夫妻をあげている。夫ヨハネス・ロンゲは、1844年夏にラインラントで開かれた僧服博覧会を法王権至上主義として批判した。そして10月1日付の公開書簡でローマ法王庁に従うことを拒絶し、ローベルト・ブルームとともに法王庁から分離したドイツ・カトリック教会を創設した(石塚1983:147)。

ロンゲは革命後、イギリスに亡命し、妻のベルタ・ロンゲ(旧姓トラウン)とともにマンチェスターとリーズにフレーベル主義幼稚園を設立した。妻の妹マルガレーテ・マイヤーは、アメリカに幼稚園を設立している。

なお、ケーニヒはそれほど言及していないが、第2回ザクセン教員集会で呼びかけ文をつくり、全ドイツ教員集会で幼稚園を国民教育制度の第1階梯とすることに大いに貢献したヴァンダーもドイツ・カトリックである。

ケーニヒは、フレーベルの「進歩」の証左として自由信仰教団やドイツ・カトリックとの結びつきを強調している。確かにフレーベルは、彼らと強く結びついていたが、彼らのように教会権力を声高に批判することはなかった。また彼らのなかの急進派のように、教会そのものを否定することもなかった。このことから、フレーベルが彼らと積極的に交流しようとしたのではなく、彼らの方からフレーベルに近づいてきたとみる方が妥当であろう。ただし、彼らとの結びつきが反革命期におけるフレーベル抑圧の理由となったことは間違いない。

3.3. 三月革命との結びつき

三月革命でフレーベルは革命派の立場に立っていたとケーニヒは強調する。

革命が勃発(3月18日)するや、フレーベルは友人たちにその感激を書簡に認めた。フリードリヒ・ホフマンには3月18日付書簡で「我が民族と祖国の幸福と至福」と革命を讃え、20日付のムーメ・シュミットへには「ドイツ民族の、自由なドイツ民族の春の朝」と書き送っている(König 1985, 邦訳139)。

かつてリュッツォー義勇軍として解放戦争に参加した日々の血が騒いでいることは、フレーベルの直接の門下生で最も重要な幼稚園女教師の一人アマリエ・クリューガーが3月25日にフレーベルに宛てた書簡で述べている。「私たちはみんな知っています。カイルハウ人は自由のために熱狂することを、古いリュッツォー義勇軍兵士がその先頭にいることを」(ebd.)。

1849年5月のドレスデン蜂起では、ドレスデンでフ

レーベルの幼稚園教員養成講座を受講していたヘンリエッテ・ブレイマンが、5月直前にフレーベルが去ったことに安堵しながら「もしフレーベルがドレスデンにいて、蜂起軍として立ち上がったなら、私は彼の命を心配したでしょう。なぜなら、彼の激情や勇気は、青年のそれに劣るものではないからです」と日記に記している (ebd. 邦訳141)。

フレーベルが革命そのものに感激したことは、ケーニヒが取り上げている様々な書簡等で確認できる。また様々な革命家とも交流を深めた。その代表がカール・ハーゲンであろう。フレーベルは、1844年の夏、ハイデルベルクでハーゲン教授と出会った。彼はフレーベルの幼稚園に感激し、自らの著書『時代の課題』で、フレーベルの幼稚園を紹介した。ハーゲンはドイツ国民議会で最左翼(ドンネルス派=ドイツ・ジャコパン派)に所属し、シュトゥットガルトの残余議会議員でもあった。反革命では迫害され教授職を失った。

岩崎次男もしばしば紹介する48年7月17日にフレーベルがハーゲンに宛てた書簡が、フレーベルの革命派への共感を言い表している。同書簡では、ルードルシュタット教員祭を前に高揚したフレーベルが、同教員祭を領邦各地の新聞等で広告することの仲介と国民議会での宣伝を依頼している。そして政治と教育が統合されて共和国的な徳が生じることを述べて、「私の教育的行為をその内奥の中核においてご検討ください—私は一世代以来共和国のためにまた共和国をめざして教育し、かつ陶冶してきました」と結んでいる (岩崎1972 / König1985, 邦訳147)。もちろんフレーベルの言葉を言葉通りには取ることはできないだろう。共和国実現のために活動している最左翼議員への依頼であるから、多分にリップ・サービスの部分があったことは十分に予想される。だが、フレーベルが幼稚園普及のためには、革命派との連帯を厭わなかったことも事実である。

革命派としてはフレーベルの甥でカイルハウ学園最初の生徒ユリウスとカールの両フレーベルがドイツ史のものにおいても著名である。フリードリヒ・フレーベルは彼らとは不仲であった。このことについてケーニヒは、「フリードリヒ・フレーベルの二人の甥への嫌悪は、根本的には、政治的、教育的見解の相違にあるのではなく、主観的領域、つまりフリードリヒ・フレーベルの権威主義的な振る舞いに見いだされる」と述べている (König1985, 邦訳144)。またケーニヒは、アマーリエ・クリューガーが、フレーベルにカールと仲直りするよう何度か忠告するが一向にフレーベルが言うことを聞かないことに苛立っていたことを紹介している (ebd.)。

革命期にフレーベルは、ドイツ幼稚園構想を打ち出している (ebd., 邦訳147)。ドイツ幼稚園は、①女子教育者や母親への生涯学習機関であること、②機関誌を発行すること、③工房学校 (Industrienanstalt) として教材

や教育遊具を開発・販売すること、④学術書を刊行することを目標とした。この工房学校について、ケーニヒは、フレーベルが次のように述べたと紹介している。

プロレタリアートの諸要求を根本的に満たすものになるのです。すなわち、労働とパン、同時に、教訓、教育によって、それと共に、人倫や倫理、節制、克己といった、そもそも社会的なものを授け、人間的な徳を与えるものなのです。このことが、私の全ての努力の究極の目的なのです (ebd. 邦訳148)。

フレーベルがプロレタリアートという言葉を使い、彼らに共感的であったことは時代の影響を受けていた証左であろう。しかしフレーベルは、階級的な立場の自覚は無かったのではないか。フレーベルは、例えばドレスデンで1939年1月に王妃の前で乳幼児期の教育に関する講演を行い、王侯貴族の称賛を浴びている (プリーファー: 109頁)。またマーレンホルツ・ビューロー夫人といった貴族との交際を考えるなら、「善玉=被支配階層」・「悪玉=支配階層」で世の中の人々を見ていたことはあり得ない。彼によって善玉とは幼稚園への共感者であり、悪玉とは幼稚園の批判者であったろう。

既述したように三月革命期は、市民層や労働者層が様々な集会を開き、組合 (Verein=協会) をつくって待遇改善や自由主義的、民主主義的要求をドイツ国民議会やプロイセン国民議会などの各領邦議会に届けようとした。教師たちはザクセン教員集会や全ドイツ教員集会などを開催し、全ドイツ教員組合や各領邦で教員組合を結成した。そのようななか、フレーベルは1848年8月17～19日にルードルシュタット教員祭を成功させ、各領邦政府とドイツ国民議会宛に、フレーベル幼稚園とその教材や遊具の普及、幼稚園教員の養成そして資金援助を求める決議文を送った。同集会では、ケルやチェチェといった第2回ザクセン教員集会のリーダーたちが呼びかけ人となっていた。その後、アイゼナハの全ドイツ教員集会で、フレーベルの幼稚園が、ドイツ国民教育制度の第一階梯に位置づけられたことは既に述べた。

ドレスデンでは、48年12月に領邦議会選挙が行われ民主派が多数を占めた。全ドイツ教員集会を主導したDr.ケーヒリーの指導下、学校法案が審議された。それは4歳から6歳までが通園する幼稚園、6歳から10歳までの子ども学校、10歳から14歳までの少年少女学校、14歳から17歳までの実業補習学校からなる統一学校制度であった。このドレスデンにルードルシュタットの集会后、フレーベルは幼稚園教員養成講座のために招聘された。ヘンリエッテ・ブレイマンによれば、ルードルシュタット集会の最大の成果は、この講座開設だったという (ebd.邦訳149)。フレーベルは当然この招聘を喜び感激した。48年10月から49年4月まで開設されたこの講座出

身者のなかには、フレーベル幼稚園の普及・発展にとって重要な役割を演じる人材が育った。ヘンリエッテ・ブレイマン、ルイーゼ・フランケンベルク、ヨハンナ・フレーベル（旧姓キュストナー：カール・フレーベルと結婚したことがフレーベルの不興を買った）、アマリーエ・クリューガー等がいた。

3. 4. ドイツ女性協会との結びつき

ケーニヒは、フレーベルの幼稚園女教師養成が、三月革命期の自由主義的・民主主義的女性運動が求めた女性の経済的自立につながり女性解放に貢献したと評価している。とくに「女性協会 (Frauenverein)」との結びつきに注目する。

ドイツにおける女性問題は、ドイツの産業革命と同時期におこる。労働者階層においては、児童労働と同様に低賃金の女性による長時間労働が問題となり、市民層においては、ピーダーマイヤーにみられる家父長家族が激しく揺さぶられた。フレーベルが1836年に『生命の革新』で家庭教育の改善を訴えたのも、家父長家族が崩壊していくこのような時代状況からである (König1986, S.170)。市民層の女性たちは、婚姻における男性への従属を排し、経済的自立、職業選択の自由とそのための中等・高等教育機会の保障、女性選挙など男女の同権化を求めて様々な女性協会を設立した。

このような女性協会でも最も著名な人物の一人は、ルイーゼ・オッターであろう。開明的な司法官であった父親の影響で政治的にラジカルに育った彼女は、自由信仰教団員であり三月前にドイツ・カトリックのロンゲや、ローベルト・ブルームと交流していた。婚姻が女性抑圧の原因になっていることを説き、女性の自立とそのため教育機会を求め、1849年4月に『女性新聞』を刊行した。後年彼女は、全ドイツ女性協会設立 (1865) の中心メンバーとなる。『女性新聞』でオッターは、フレーベル幼稚園とその教員養成に女性たちが、積極的に参加することを訴えた (König1986, S.177)。

ケーニヒは、ヘンリエッテ・ブレイマンが、ルードルシュタット教員集会でフレーベルの幼稚園女教師養成に感激して次のように日記に記したことを紹介している。

フレーベルとミッテンドルフは、他のたいていの男性とは女性観が全く違っていました。彼らは私たち女性を、結婚以外にも子どもの養育者として尊敬される地位を与えるに十分に価値あるものと見なしました。私たちは未婚でも、人間を高貴なものに高めることに理解と自覚をもって働くべきなのです。私たち女性は、私たち自身にとっても価値あるものであり、そうなることができるのです (König1986, S.172)。

当時は、市民層の女性が金銭を得るために働くことはタブーとされていた。女性教師も寡婦か未婚女性に限られていた (川越1990)。フレーベルの友人には、自由信仰教団員でノルトハウゼンにフレーベル主義幼稚園を開設したルドルフ・ベンフェイのように、女性は、男性と同じ義務を果たすものであり、同じ権利を受けるべきと主張した者もいた。もっともフレーベル全集の編集者ランゲは、「女性解放は作り事であり、現実の生活に何らの根拠をもたない文学上の物語の影響を受けているに過ぎない」と述べているが、こちらの方が多数派であった (ebd., S.174)。

フレーベルの幼稚園女教師養成論は、彼のキリスト教的人間観 (「聖母マリア崇拜」：豊島2014) による母性礼賛から来る「母性主義フェミニズム」 (赤木2007: 11) と言えるものに由来しており、三月革命期の急進派が求める男女同権思想に基づいたものではない。しかしながら、結果として女性の経済的自立と女性の社会的地位向上に繋がったことは間違いない。メンバーの多くが自由信仰教団員であるハンブルク女性協会がフレーベルを招聘し、幼稚園女教師養成講座をはじめたこと、カール・フレーベルを学長とし、フレーベル主義幼稚園を附属として有する女子大学 (Hochschule für Mädchen) を設立 (1850年開校、52年閉校) したことも、女性解放活動 (フレーベル自身は「女性解放」という言葉を使っていない) への共感からである。

ハンブルク女性協会は、ドイツ・カトリックのリーダー・ロンゲによって主導された。ロンゲは領邦各地の女性協会にフレーベル主義幼稚園を設立することを求めた。ハンブルク女性協会によって1850年3月に設立された初の市民幼稚園は、フレーベル主義に基づく教育舎であることを高らかに宣言している (König1986, S.188)。

ハンブルク女性協会 (とくにヨハンナ・ゴールドシュミット) からの招聘によってフリードリヒ・フレーベルは1849年11月から1850年5月まで、カール・フレーベルはハンブルク女性協会のとくにエミーリエ・ヴェステンフェルトやベルタ・トラウンの招聘に応じて49年11月から51年5月まで同地に滞在した。ルイーゼ・オッターは、『女性新聞』で、この女子大学とフレーベルの講座について紹介した。フリードリヒの養成コースと、カールの女子大学は、同じフレーベル主義幼稚園教育とその教員養成を行っていたのだが、両者が交わることはなかった。カールはフリードリヒに大学での講座担当を要請したが無視され続けた。フリードリヒがカールを毛嫌いしていたからである。その理由は多様であろうが、カールがフリードリヒの教え子であるヨハンナと結婚したことが理由とされている (岩崎1999: 317)。アマリーエ・クリューガーが再三再四、カールとの仲直りをフレーベルにお願いしてもフレーベルは聞く耳をもたなかった (ebd., S.182)。

カール・フレーベル夫妻は、女性協会からの依頼もあって、パンフレット『女子大学と幼稚園』（1849）を執筆する。同パンフレットは、女子大学案内となるものであったが、その内容は反体制的権力批判で、社会主義的内容をもっていた。同パンフレットでカール夫妻は、プロレタリアートの悲惨を訴え、その原因を社会の階級的分裂にみる。そしてその悲惨を解消させるためには貧民階級のために、普通教育と職業教育が与えられるべきこと、そして幼稚園での集団生活によるエゴイズムの克服をはかるべきことが述べられている。女子大学は、女性の教養教育と幼稚園や国民学校教師への専門職養成によって女性の解放を目指すものであった（岩崎1999：314）。

カールは、カイルハウ卒業後イェナ大学で学び、ロンドンのペスタロッチ学校で数学を教えた。1833年兄ユリウスに呼ばれてスイスで教え、チューリッヒで45年に幼稚園をもつ教育舎を開校。アマリエ・クリューガーは同幼稚園の園長だった。同教育舎には、ドイツ社会民主党の始祖となるヴィルヘルム・リープクネヒトや、共産主義者としてマルクスやエンゲルスと交遊し、第一インターナショナル（1864）のメンバーとなるフリードリヒ・ボイストが教師として滞在した。カールも、ユリウスもフリードリヒ・フレーベル存命中は筋金入りの社会主義者であった。

ユリウスとカールという二人の甥の存在、無神論や無政府主義・社会主義と親和的とされる自由信仰教団と結びついた女性協会による幼稚園運動、そしてカールの女子大学パンフレットの内容が決定的となってフレーベルの幼稚園に禁止令が下されていく。

3.5. 幼稚園禁止令

ケーニヒは、フレーベルが歴史的「進歩」の立場にたっていたことの集大成をプロイセンによる幼稚園禁止令（1851）にみている。

同禁止令の理由について、C・ヴァインラインは、プロイセン政府が社会主義者で三月革命の旗手ユリウス・フレーベルとフリードリヒ・フレーベルを取り違えた結果、フレーベルの幼稚園が社会主義に親和的で、子どもを無神論者に育て上げるものと判断したと述べる（Weinlein1887, 邦訳115頁）。C・L・A・プレッツェルは、著名な社会主義者カール・フレーベルが、『女子大学と幼稚園』でフレーベルや幼稚園を強く支持したことから、幼稚園は子どもを社会主義や無神論へ育てると判断されたとしている（Pretzel 1921, 邦訳114）。

禁止令は、フレーベルにとっては青天の霹靂であり、彼自身絶縁状態のカールやユリウスと混同されることは迷惑以外の何ものでもなかった。プリューファーは「フレーベルは決して特定の政治的党派には所属しなかった」（プリューファー：169）と述べており、シュプ

ランガーもフレーベルに政治的立場はないと記している（E.Spranger:Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt, Berlin 1938：S.7）。

ヴァインライン、プレッツェル、プリューファー、シュプランガーの言っていることは間違いのないであろうが、ケーニヒは、革命派や自由信仰教団や女性協会との結びつきに、禁止令の理由を見いだしている。フレーベルにとっては、革命派であろうが反革命派であろうが、自らの教育思想や幼稚園に賛同してくれる者全てが友人だった。1849年にはじまる反革命の嵐は、革命派と交流をもった全てに迫害が為された。

反革命の時代になると、多くの者がフレーベルとの関係を躊躇した。ディースターベークの教え子で、女性協会の設立に関与したカール・ロールバッハによると、自由信仰教団と結びついた女性協会は様々な迫害を受け、女性協会の多くが沈黙を余儀なくされた。マーレンホルツ・ビューローさえも、左派系新聞とみなされた国民新聞等にフレーベルや幼稚園の名前を出すことを拒否したという（König 1987, S.84）。ルイーゼ・オットーの『女性新聞』は、1852年に発禁処分を受けて廃刊した。

自由信仰教団も迫害された。テオドル・ペーシェは、14年の禁固刑を受け、プロイセン国民議会議員で幼稚園運動の推進者だったバルツァーは、48年8月には扇動された群衆の襲撃を受け訴追された。彼は、1851年1月にノルトハウゼンに幼稚園を設立し、自由信仰教団の機関誌でフレーベルと幼稚園を紹介した。同誌で彼は、フリードリヒ・フレーベルがカールやユリウスと混同され、幼稚園に対する誤った認識が広まっていると述べている（König 1987, S.98）。彼の幼稚園には、プロレタリアートの子どもやユダヤ教徒の子どもも登園したが、「手続き上の不備」を理由に7月には閉鎖を余儀なくされた。

カール・フレーベルは既にチューリヒ時代から当局の札付きであり、彼の学校は革命派で亡命者の受け皿になっていた。アマリエ・クリューガーは彼の幼稚園の園長であり、ルードルシュタット教員祭を主催したチェチェもしばしば訪れていた（ebd.S.88）。1851年には、既述したパンフレット『女子大学と幼稚園』の内容からも、ハンブルクのカールの女子大学は、その幼稚園と合わせて扇動家の巣窟で、学問を装いながら革命の計画が練られているとして反対運動が起こり、カールは52年に当地を去りスコットランドに移住した。カールはエジンバラの女学校の校長となった。

ルードルシュタット教員祭を成功させた一人ヨハネス・シュタンゲンベルガーも、投獄され教職を追われた。カイルハウの教師で、革命ではバリケード戦士だったツェラーは、アメリカに亡命した。

フレーベルがドレスデンで教員養成講座を開講していたその頃、ベルリンでは49年1月15～29日まで師範学校長・教員会議が開催され、その場でフリードリヒ・ヴィ

ルヘルムIV世は、無神論の教師が無宗教を教えた結果が、三月の暴動につながったと述べていた。

1949～50年、フレーベルはまだ活動できた。ハンブルクで幼稚園養成講座を行った後、50年にはマリエントールで養成講座を開設している。またアルテンシュタインで幼稚園祭を成功させた。だが、禁止令が公布されていく。

1851年3月、エアフルト政庁は、自由信仰教団員シュトルヒ博士のノルトハウゼンの幼稚園に関する報告を行った。これを読んだフリードリヒ・ヴィルヘルムIV世は、ラウマー文相とヴェストファーレン内務相に書簡を送り、「幼稚園はフレーベルの社会主義制度の一部分を成しており、子どもたちを無神論や社会主義的原則へと育成することを目論んでいる」と忠告した (ebd.,S.99)。エアフルト政庁やラウマー文相は、カール・フレーベルのパンフレット『女子大学と幼稚園』を読んでおり、彼らは、同パンフレットで書かれていた社会主義への理想、宗派的な宗教教育の否定、幼稚園にはじまる統一的な国民学校制度などを問題視した。5月にはエアフルト政庁は、フレーベルのカイルハウ学園が10年以上も前から「扇動家の巢窟」として調査の対象となっていたことをプロイセン政府に報告した。

自由信仰教団と結びついていること、それは無神論へと子どもを教育することに繋がること、そして幼稚園は社会主義体制へと子どもを育てることになるとして、プロイセン政府は8月23日に幼稚園を禁止した。その際、カール・フレーベルのパンフレットが決定的な証拠とされた。フリードリヒ・フレーベルは、カールとは何の関係もないこと、禁止令はプロイセン政府の誤解であることを訴え、国王にも陳情書を送ったが顧みられることはなかった。

日本のフレーベル研究は、フレーベルの主張そのままに幼稚園禁止令はプロイセン政府の誤解に由来するものであるとする研究が多い(荘司雅子等)。ケーニヒは、プロイセン政府がカールとフリードリヒを取り違えていたというのは全くナンセンスであり、ユリウスとカールとフリードリヒの3名のフレーベルを完全に知っており、20年代はシュックマン文相、40年代はアイヒホルン文相、50年代はラウマー文相とその官僚によってフレーベルは常に監視の対象であったと述べている (ebd.,S104)。そして彼はラウマー文相の次のメモ書きを紹介している。

私の考えでは、フリードリヒ・フレーベルは次のことでのみ、カール・フレーベルと区別される。つまり、カールは自らの意図を明瞭に首尾一貫して表現するのに対して、フリードリヒは自らの意図を、非常に支離滅裂でミステリアスに表現するが、たぶん、よく分かっていないのだろう…私の考えでは、だ

から、フリードリヒ・フレーベルをカール・フレーベルとは違うと判断する何らの理由はないのである—ラウマー。9月1日。(ebd.)

傷心のなかでフレーベルは、51年9月にリーベンシュタインの教員祭を成功させた。晩年のフレーベルはアメリカ移住を真剣に考えるが、果たすこともなく52年6月に永眠した。

4. 唯物史観からみたフレーベル

以上、旧東ドイツのマルクス主義教育学者であるヘルムート・ケーニヒが、唯物史観からフレーベルをどう評価したのかをみてきた。ケーニヒは、フレーベルが常に民衆の側に立ち、自由主義的、民主主義的教育思想と教育活動を展開してきたことによって、歴史の「進歩」における役割を演じてきたと捉える。その証左となる事項として、ブルシェンシャフト、自由信仰教団、女性協会、三月革命の革命派やドイツ教員運動家、社会主義者それぞれとの結びつけをあげ、その結びつきの集大成が幼稚園禁止令だと述べている。

もちろんこの見方はフレーベルの一断面を表しているに過ぎないと批判は妥当である。繰り返すが、彼にとっては、自らの教育思想や幼稚園に賛同してくれる者であれば、革命派であろうが反革命派であろうが、何らの拘りはなかった。だから、カイルハウ学園の教師に革命派がいようが、自由信仰教団といった反体制派によって幼稚園が設立されようが、フレーベルにとっては彼らの主義主張やイデオロギーを問題視する必要はなかった。革命派や反体制派がフレーベルを愛したとも言えるのである。

フレーベルの交流の広さを考慮するなら、ケーニヒの主張とは逆に、フレーベルと王侯・貴族とのつながり、権力者や保守主義者との繋がりを論じることでも可能である。例えばマーレンホルツ・ビューローは貴族階層であり、フレーベルも既に述べたが王侯・貴族の前で幼稚園を紹介している。マリア・クレーマーがリーベンシュタイン教員祭で、彼女がヘッセン・フィリップスタール家の王子の教育を引き受けていることを知ってフレーベルは感激している (ebd.,S114)。また、ユンカーや資本家は、既存の社会秩序維持のために幼稚園の有益性をみていた (König 1986, S.178)。これらの視点からフレーベルを捉えるなら、彼は権力側で反革命的な保守主義者と写る。

彼の生の合一の思想は、革命派も反革命派も、富裕層も貧困層も、自由信仰教団員も正統派信仰者も全てを統合することから、これら対立する両者からフレーベルは愛されたのであろう。唯物史観からフレーベルを捉えることは一面的の誹りは免れないが、ともすればロマン主義の陰で見失われがちになるフレーベルの「進歩」の側

面を評価することは、フレーベルの再評価に繋がるのではないだろうか。

日本では岩崎次男によって、ケーニヒと類似のフレーベル理解が成されている。岩崎も、ブルシェンシャフト（はあまり触れていないが）、自由信仰教団、女性協会、三月革命の革命派やドイツ教員運動家、社会主義者とフレーベルの結びつきを論じている（岩崎1999）。もっとも彼は、旧東ドイツで1952年に刊行された『フレーベル没後100周年誌』（Gedenkschrift zum 100.Todestag von Friedrich Fröbel）から多大な影響を受けている。1930年生まれの岩崎が22歳の時に刊行されたマルクス主義に基づくフレーベル記念誌である。ケーニヒと同類のフレーベル解釈を行っていく素地がここから作られたと言える。本稿は、ケーニヒの論考を手段にフレーベルを再評価するものであるが、それは期せずして岩崎の再評価にもつながったと思う。

本稿は、ケーニヒの論考をもとに唯物史観からみるフレーベル像を明らかにすることに主眼を置いた。よって、書簡の引用その他では孫引き（場合によっては曾孫引き）になっている箇所があり、純然たる学術的史料に基づいた研究とは言えないところがある。これは、今後の課題としてドイツ本国のアルヒーフその他での史資料収集にあたっていきたい。

註：

(1) 以下の4論文

- ① Helmut König : Die Lehrer an der Seite der Volksmassen in der Kämpfen der Bürgerlich-demokratischen Revolution 1848/49 IN: Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 20/1980 Berlin 1980. (勝山吉章『ドイツ1848年革命期における教員運動史史料集成』（『福岡大学研究部論集』B:社会科学編 Vol. 6 2013.12)に「1848・49年の市民民主革命の闘いにおいて民衆側にいた教師たち」として邦訳を所収)。
- ② Ders.: Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil I. IN: Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 24/1984 Berlin 1984. (勝山「フリードリヒ・フレーベルと、19世紀前半における小市民民主主義との結びつき 第一部」として『福岡大学人文論叢』39巻3号に邦訳を所収)。
- ③ Ders.: Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil II. IN: Jahrbuch... a.a.O., 25/1985. (前掲『ドイツ1848年革命期における教員運動史史料集成』に第二部として邦訳を所収)。
- ④ Ders.: Friedrich Fröbels Verbindungen zur

kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil III. Teil IV. IN: Jahrbuch... a.a.O., 26/1986. 27/1987. (本誌に第三部、第四部として邦訳を所収)。

(2) 筆者が旧東ドイツのフンボルト大学に留学していた頃（1987-88）、マルクス・レーニン主義は必修の科目であった。そのなかで、歴史上の人物が登場する場合は、必ず、「種分け」が為されていた。「民主派＝革命家＝進歩」か「保守派＝反動家」かその中間か。今から思えばその単純化に疑問をもつが、当時は、時代劇の勧善懲悪と同じで分かりやすく、面白かったのは事実である。

(3) ドイツ三月革命と教員運動については、以下を参照した。

- ・ C. L. A. Pretzel : Die Lehrerbewegung des Jahres 1848. IN: Geschichte des Deutschen Lehrervereins in den ersten fünfzig Jahren seines Bestehens, Leipzig 1921. (前掲『ドイツ1848年革命期における教員運動史史料集成』に邦訳を所収)。
- ・ Ders.: Der Allgemeine Deutsche Lehrerverein. IN: Geschichte des Deutschen Lehrervereins in den ersten fünfzig Jahren seines Bestehens, Leipzig 1921. (前掲『ドイツ1848年革命期における教員運動史史料集成』に邦訳を所収)。
- ・ Christian Weinlein : Gegner und Freund der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung, und Die Verhandlungsgegenstände der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung, IN: Geschichte der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung, Leipzig und Berlin, Verlag von Julius Klinkhardt 1887. (前掲『ドイツ1848年革命期における教員運動史史料集成』に邦訳を所収)。

(4) Lulius Kell : ユリウス・ケル

1813年5月2日、ハイニヘン近郊のラッペン村に生まれる。牧師の息子。神学徒で1838年からキルヒバルクの校長。数年後、病気のために校長職を辞職せねばならなかった。キルヒバルク時代から、著述活動をしていた。とりわけ『父リヒャルド』は国民教育書として多くの賛同を得た。病氣療養のため、妻や子どもたちと数年間過ごした実家で、彼はこのような活動を熱心に続けた。1846年からライプツヒヒに住んだ。当地で彼は（すでに1833年に『ザクセンの学校と監督者の使い』として刊行された）『ザクセン学校新聞』と青少年雑誌の編集を引き受けた。前者は、彼の目標自覚的でエネルギー的な指導下で、相当な内容量と名声を得た。ケルの著作活動は、とくに、教育学的、学校政治的領域のみならず、神学的文芸的領域でも進められた。1845年彼の有名な著書『ザ

クセン国民学校教師の希望』が刊行。身分制議会へのザクセン全教職員の請願の草案だった。そのためにドレスデン教育協会をもとうとする企ては失敗するが、ケムニッツの「教育者社会」によって請願が為された。1848年ライプツヒで作成された綱領は、この著書に基づく。ザクセン教員組合と同様に全ドイツ教員組合の設立にあたって、ケルは卓越した役割を演じた。また彼は1848年のフランクフルト教員会議を指導した。その間彼は、下院議員にも選ばれたが、穏健左派に所属した。1849年5月28日に死去。(Rissmann, Geschichte des Deutschen Lehrervereins, 1908)

(5) Zschetzsche, Gust. Friedrich : チェチェ

若くてピチピチの(最初は22歳)、エネルギッシュな第2回ザクセン教員集会の議長。彼の議長下で、全ザクセン教員組合や全ドイツ教員組合が設立された。1849年の5月事件後、ドレスデンを去ってスイスに行く。当地で、彼は後年、チューリッヒの工業専門学校(Polytechnikum)の教授として死去。彼は、絶妙な機転をもった、人なつこい存在で、混乱した議場の全体、理路整然とした論者もいれば、容赦の無い痛打を浴びせる論者、脱線した論者や何か悪態ついた論者を相互に結びつけたことによって、集会全員からその功績を称賛された。さらに付け加えるなら、チェチェは、1849年に設立されたスイス教員組合の理事だった。それ以上のことは分からない。(Rissmann 1908)

参考文献：

- 勝山吉章(2013)『ドイツ1848年革命期における教員運動史史料集成』(『福岡大学研究部 論集』B:社会科学編 Vol. 6 2013.12.)
勝山吉章(1990)「政治教育者(Politischer Pädagoge)としてのフリードリヒ・フレーベル」(ペスタロッチ・フレーベル学会『人間教育の探究』第3号)
勝山吉章(1993)「教員運動家としてのK・F・W・ヴァ

- ンダーの生涯と教育活動」(『福岡 大学人文論叢』24巻4号)
勝山吉章(1997)「K・F・W・ヴァンダーの国民学校論」(『福岡大学人文論叢』29巻1号)
勝山吉章(1998)「ユリウス・フレーベルからみたカイルハウ学園と叔父フリードリヒ・フレーベル」(『福岡大学人文論叢』30巻2号)
良知力(1971)『マルクスと批判者群像』平凡社
岩崎次男(1972)『幼児教育論 フレーベル』明治図書
荘司雅子(1975)『フレーベルの生涯と思想』玉川大学出版
井上正志(1975)「三月革命期における教師の組織形態」(『京都大学教育学部紀要』18巻)
良知力(1978)『向こう岸からの世界史』未来社
石塚正英(1983)『三月前期の急進主義』長崎出版
ゲルト・ガイスラー(1986)「ドイツ民主共和国におけるペスタロッチ・フレーベル」(『人間教育の探究』第一号)
川越修(1988)『ベルリン 王都の近代』ミネルヴァ書房
川越修他(1990)『近代を生きる女たち』未来社
フレーフェルト・若尾他訳(1990)『ドイツ女性の社会史』晃洋書房
井上祥子他(1998)『ジェンダーの西洋史』法律文化社
岩崎次男(1999)『フレーベル教育学の研究』玉川出版
森田尚人他(2003)『教育と政治』勁草書房
太田和宏(2004)「自由主義と労働者教育—19世紀中葉ドイツにおける労働者(教育)協会の歩み—」(『経済学研究』第70巻4・5号合併号)
若尾祐司他(2005)『革命と性文化』山川出版
赤木登代(2007)「ドイツ第一派女性運動における女子教育」(『大阪教育大学紀要』2007.2.)
プリュウファー、J 乙訓他訳(2011)『フリードリヒ・フレーベル』東信堂
豊島清浩(2014)『フレーベル教育学研究』川島書店
白川蓉子(2014)『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究』風間書房